時とし
み

平林
たい子

文藝春秋版

たいこ

愛と悲しみの時

昭和三十五年四月三十日　発行

定価　三〇〇円

著作者　平林たい子

発行者　車谷弘

発行所　文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ
振替口座東京七八七四三

印刷
製本

Printed in Japan

目

次

戦争の贈物……七
旅の道伴れ……二五
伊東の夜……四四
新居の客……五九
ハンケチの口紅……七七
見かけた女……九四
離婚……一〇九
結婚……一二一
暴風……一三五
珠は砕けず……一五三
深夜の訪問者……一七一
母となる希い……一八八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

白木家の見合い……二〇五
石川の求婚……二一八
銀座にて……二三八
人工受胎……二四四
告げ口……二五九
その決意……二七〇
復活への道……二八四
詭　計……二九五
いとわしい現実……三一〇
子供の出生……三二一
蘇りの歌……三三六

愛と悲しみの時

戦争の贈物

箱根の宿は、仲人の山中課長からの口添えがあったので、家族風呂つきの立派な離室をとってあった。

この頃のはやりらしく、広幅の檜天井が真中から両側へ合掌型に傾斜して、手漉きの和紙を透かしたはめ込みの螢光燈がほんのり灯っていた。

そのやわらかいあかりの下で二人ははじめてさし向いの夕食を終った。しかし女中が膳をさげに来た頃から庄一郎は無口になって、煙草の灰をぽとぽと卓の灰皿に落すばかりだった。千江子も、何か事が迫って来た面映ゆさに、言葉がのどで凝ったように出て来なくなった。

戸外では、庭の筧の水が風でときどき落ちる音をかえる。

「ひどい風になりましたね」

枕掛と敷布をもって入って来たさっきの女中は二人のてれた様子を救うように、慣れ切った声をかけた。

千江子はだまっていた。庄一郎もだまっていた。

女中は、そんな風情も見なれているので格別好奇な目も向けなかった。あけ放した襖の向うで、彼女は白い毛布や臙脂の羽根布団をひろげてぶわぶわと糸埃を立てる。白い敷布は雪のように白く、臙脂の赤は天井まで映えてばあっと赤かった。

「も一度風呂にお入りんなって、あたたまってからおやすみんなるとよござんすね」

女中は心得顔で教えるように言った。

「はあ」

しかし、庄一郎がだまっているので、千江子は、とりつく島もなかった。千江子もてれてはいるけれども、庄一郎は男だから、何とかぎこちないその場をリードして気がるなしゃれでも言ってくれそうなものだと思っていた。

女中が去ると千江子はとうとう、

「どうなさいます。も一度お入りんなります？」

と自分から庄一郎にたずねた。さっき二人は別々に一度入っているのだった。

「君は入っていらっしゃい。僕はもう沢山……」

その言葉は、まるで錘がついているように重かった。千江子は息をのんで、彼の顔を見た。

が、庄一郎は顔をそむけて千江子の追って来る目ざしをさけていた。その無表情は厚い壁のようなもので、そこから千江子が心の中へ立入ってくるのをかたく拒絶しているように見える。

東京駅で、見送りの人々から花束など貰って電車にのり込むまでの彼は快活だった。生れてはじめて二人きりで電車にさし向いになってから、千江子は、庄一郎の挙措に何か気になるものを感じはじめた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

戦地で爆弾の破片をうけたため、右足がほんの少し引摺るということは、仲人にはじめからきいて知っていた。銀座のレストランで見合して一緒に外に出たときにも、彼の歩き方を見て、「ああそうだった」とそれを思い出した。けれども、予めきかされていたことであったから、その不幸をいたむ暖い思いが胸に湧いただけだった。

しかし、ここにくる電車でその片足の靴をひきずって手洗いに行き、かえって来て向いの席に腰をおろしたときから様子は変っていた。彼は、自分を見ている千江子に無生物のようなよそよそしい目ざしをかえして自分だけの思いにこもっていた。千江子は胸を突かれた。それに、二人だけの旅はもっと詩のある甘いものかと想像していたのにその前からさし向いの席で、彼は、ポケットに入っていた印刷物を出してよみつづけていたのだった。

いつまでもそれから目を離さないので、それとなくのぞいてみると、何のことはない、今日の結婚式場だった華燭会館の営業目録であった。すでにそこで式を終っているのに何のためにそれをよむ必要があるのだろう。それに全部よんでも五分とかかりそうもない印刷物に、いつまでも顔を傾けているのもわけがわからない。しかしまだ打ちとけて話し合ったこともないのだからてれているのだと気にしないことにしてその場はそれで忘れた。が、ここについてからの挙措も全くちぐはぐで二人の気持は行き違っていた。

千江子は、庄一郎がやめるというのに一人だけ立って風呂にも行きかねた。彼女は恨みをひびかせた声で、

「……わたくしもやめにいたしますわ」

それなら、自分も一緒に行ってやろうと言うかと思ったのに庄一郎は何も言わなかった。また始末しようもない沈黙が挟まる。彼はねる支度をするでもなく、書院窓の小机にあった宿の絵はがきに見

入っている。それがまたちょうどひるま電車で営業目録を見ていたときのような、ながい時間であった。

千江子はそんな無意味な時間に居たたまらずに立上って手洗いに行った。かえりに、洗面所の窓から、黒い山の稜線を眺めていると、ぽつんとふもとについた灯が悲しい千江子を見戍っているように風の中で息づいていた。

いまごろ、実家の父母や妹は、婚礼に出席のため大阪から上京した従兄の陸男と一緒に、自分たちの様子を描いて話題にしているにちがいない。誰もこんな硬い雰囲気を想像している筈はない。

二人はまだ接吻さえ交わしていなかった。千江子は、いつのまにか涙ぐんでいた。しかし考えてみると、電車の中でも自動車の中でも、千江子ははにかんでばかりいて、自分から男性によりそって男の生まれたままの固い心をほぐしてやるという努力はしていなかった。

彼があんなに頑なに心をとざしているのは、自分の愛情の訪い方が生ぬるくてまだその扉がひらかれていないということなのかも知れない。

千江子は、自分が彼の胸の中に移り棲んでいないのかと思うと愕然とする。急に必死な気持になっていた。

彼女は体をひるがえして、あまり巧でない媚を頬につくりながら寝室への扉をあけた。

「少しねむくなりましたわ。もう九時ですのね」

ああ、こんな言葉を、新婚の初夜に女から言わせるとは男は少しひどくないだろうか。想像の上では、庄一郎が言葉で綴りきれない愛情に破れそうなほど興奮して、暴力に似た荒々しい力を千江子の上へむがむじにふり注ぐものときめていたのに——

「もうやすみなさい。僕もすぐねるけれどね……」

と彼は言った。

「はい」

まだ彼の手には四枚一組の、この宿の絵はがきが握られていた。彼は、千江子が寝室の襖をあけたけれども腰もあげようとはしない。こんな微妙な時に千江子は、庄一郎にもう一度声をかけるおどけ者の立場に立つことはできなかった。

宿の浴衣と丹前とは、きちんと箱の中にたたんであった。しかし千江子は、スーツケースから華やかな友禅の寝巻に浴衣を出して、いままで固くるしく着ていたカクテルドレスのホックをピチピチ外す。

「おさきに——」

彼女はかるい羽根布団を体のかさだけ盛り上げて毛布の襟をあごにのせた。目は薄くつぶりながら、隣室の庄一郎をじっと見ていた。とても眠るどころではなかった。一時間半ほどしているうち、火鉢の火がなくなったのか、庄一郎は立上って、例のかるい跛をひきながら寝室に入って来た。

千江子は、なぜともなく、眠ったふりをしないではいられなかった。庄一郎は立ったまま、隣室のあかりで千江子の寝姿をちょっと見下した。そして、引返して灯を消してくると丹前をきたままごろりとふとんの中に入って、向う向きにねた。

庄一郎が床に入った時、さすがに千江子は緊張して胸がときめいた。しかし、廊下のあかりで見える庄一郎の布団は、一とつづきの山脈のように堆高いまま動かない。予期していたとはいえ彼が千江子をこれほど無視してたとはやはり意外だった。千江子は緊張をゆるめながら何ともいえない失望に落ち込んだ。けれどもやがて事の多かった一日の疲れで失望のまま、引込まれるような眠りに入ってしまった。

なれない室で夜中にはおどろく程庭の筧の音も高くなった。千江子は樹木をならす風の音にも何度か目をさました。そのたびに庄一郎の方を見たが、彼は身動きもせずに眠っていた。

しかし、あたりが青く澄んで夜があけはじめると、千江子は理性が息をふきかえしたように思慮ぶかくなっていた。はじめての夜に庄一郎が千江子の床を訪わなかったことは、ゆうべ思った程重大事ではないのかも知れない。

見合結婚で、二人はいままで知らない他人だったのだ。二人の間に何か雰囲気が生まれるまで、彼は慎重にそのことをのばそうというのではなかろうか。千江子のほんとうの気持はそれほど庄一郎の肉体を求めていたわけではない。むしろ、その事実を想像すると、無惨で疎ましさの方がさきに立つほどである。けれどもただ、慣習として、その垣を向うから越えて貰わないことには、何か二人の間に見えない境界が立ちはだかっていた。庄一郎を愛しはじめている千江子にはそれがもどかしかったのだ。

千江子は、つとめて快活になって、彼が起きないうちに風呂場で化粧してから髪を直しにかかった。華燭会館の美容師が結ってくれた髪はあまりに個性のない七三分けの外巻きだったから、自分でセミアップに梳き直して、毛さきを自然にうしろへたらすことにした。彼女は、ゆうべの懊悩から見ちがえるほど表情に深味を加えていた。赤くぬった唇は、何か不満を現して、むずむずと蚕のようにうごめいていた。

室にかえってくると、庄一郎はポーチの椅子から凄艶になった千江子を眺めた。

「あら、いつお起きになりましたの。お目ざめのときにあつい蒸しタオルをもってってあげるつもりでしたのに」

「そう、それは早まったなア。も一度ねるかな」

「ええ、そうして下さいまし。はじめの習慣が大事でございますからね」

千江子は笑いながら、風呂場にひきかえして湧き口のあつい湯でタオルをしぼった。室にかえってみると、庄一郎はほんとうに床の中に戻っていた。

千江子は、彼の枕元に坐って、よい匂を漂わせながらたたんだタオルをさし出した。きのう一日で、あごのまわりの髯が大分青くなった庄一郎は、何か男らしい体臭を発してそれを手にとった。

結婚まえの千江子の新家庭設計では、そのタオルで毎朝彼の顔から手から背中まで拭ってあげてから起す筈だった。が、他人としての境界がとれていない夫の体に、無遠慮な手をのばす勇気はなかった。

庄一郎は起上った。彼がきのうの快活をとり戻しているのはうれしいことだった。二人は朝飯がすむと早速出発することにした。予定ではこの宿に二晩泊ることにしてあったのだが、狭い室の中に、二人きりで顔を合わせていることを、庄一郎が好まない風だった。

箱根から熱海まで、二人はハイヤーにのることにした。ゆうべの風が凪いでから、冬の空は鉄を磨いたように晴れわたっていた。明るい空の色がうつるためか千江子は彫りの深い目ざしをしていた。彼女は、庄一郎と並んで、気にならない程度に、体をすり合わせた。そのうちに、庄一郎の方から、千江子の手を探して来た。千江子はバックミラーを気にしながら、こっそり彼の手を握っていた。果物が熟するように二人の気持は自然に熟して行った。

「幸福ですわ——」

千江子は酔ったようにささやいた。

「僕もだ……」

運転手の目がなければ、千江子は庄一郎の膝に顔をふせて、きのうの怨みを思うさまくどきながら

温い涙をしとど彼の肌に徹してやりたかった。そんなことをかつて求めた千江子ではなかった筈だけれども、彼女は、知らず知らず、今晩の宿でのくるめく激情を思って空恐しいような期待をもった。

ホテルについて見ると、まだ昼前だった。二人は荷物を置いて、金色夜叉の碑を見ながら、海岸を一とはしりドライヴして、食事をとるため、小料理屋に入った。

この日も、千江子は、早く室に落ちついて二人きりになりたがっていた。けれども庄一郎は、いつまでも他人の中にまじって歩きたがっていた。

「早く宿についたってつまんないよ。こんなに晴れて海もきれいなのに、お湯にばかり浸っている気はしないね。お燗徳利じゃあるまいし」

「でも、わたしは、まだ貴方とじっくりお話がしてないから——男の方って、どうしてこんなに外がお好きなのでしょうねえ」

「これから、いやというほど話をする機会はありますよ」

庄一郎は千江子の希いからするするとうまくぬけ出していた。

しかし、ひるすぎになると、空が曇って、海は鉛色になった。寒い北風が海の方から吹き出した。いや応なし二人はホテルにかえった。

「いま、家族風呂の湯加減がちょうどよろしゅうございます。どうぞ御一緒に——」

中年の番頭がドアの外で声をかけた。

「ああそう、どうもありがとう。じゃあ……」

千江子は、目をつぶって谷底にとびおりるような気持で庄一郎と一緒のふろに入るつもりになっていた。自分の方から庄一郎に迫って行くことに心をきめたとき、千江子は羞恥のうす衣を思いきり自分で剝ぎとって、肚はきまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com